

第5回江別市行政審議会 第3部会 会議録（要点筆記）

日 時：平成25年6月10日（月） 18:00～20:50

場 所：江別市役所 市長公室

出席委員：隼田委員、藤本委員、蛭名委員、湯浅委員、高儀委員（計5名）

事務局：鈴木企画政策部長、米倉企画政策部次長、千葉課長（政策調整課）、西田参事（総合計画担当）、村田主査（総合計画担当）、長谷川主任（総合計画担当）

■開会

■議事

（1）えべつ未来づくりビジョン＜第6次江別市総合計画＞ 素案について

○ 湯浅委員

「江別市」という表現がたくさん出てきますが、行政主体としての「江別市」という意味だけでなく、行政区域としての「江別市」という意味でも使っているという理解で良いですか。

○ 事務局

江別市役所という意味の「江別市」と、広いエリアで江別全体を表す意味でも「江別市」という表現を使っています。

（2）えべつ未来づくりビジョン＜第6次江別市総合計画＞別冊 えべつ未来戦略について

○ 隼田部会長

今日は戦略3に関する部分に焦点を当てて議論したいと思います。戦略3の内容がこれまでの審議経過をきちんと踏まえたものになっているか、方向性がズレていないかということを確認していただきたいと思います。また、各戦略を推進するにあたっての留意点などについても、ご意見をいただきたいと思います。総合計画は、個別の事業計画ではありませんので、広く解釈できるような文言になってしまう部分がありますが、その中でも伝えるべきことをきちんと伝えることができているかどうかをご確認いただき、できていない部分については、留意事項として答申に盛り込んでいくことになります。今日はその確認のための議論をしていきたいと思います。

○ 高儀委員

戦略プロジェクト3B③「高齢者がいきいきと活動しやすい居住環境の充実」の中に、道路のバリアフリー化のことが入っていても良いのではないのでしょうか。段差があった

り、つまりきやすいところがあったりしますので、それを解消するための計画を立てて整備していくと良いのではないのでしょうか。

○ 隼田部会長

素案の資料は本日配布されたばかりですので、次回までじっくりとご覧いただきたいと思いますが、えべつ未来づくりビジョンの本体に「まちづくり政策分野」が記載されています。その27ページの政策分野05-01「市街地整備の推進」に（5）「バリアフリーの街並みづくり」とあります。そこが、えべつ未来戦略（別冊）の16ページの「関係する主なまちづくり政策」の欄で参照されており、道路のバリアフリー化のことは取組の候補として挙げられていることになると思います。

今のように、お気づきになったところについてご意見をいただいてチェックをしていき、漏れているところがあればそれについて第3部会として答申に盛り込んでいくという作業をしていきたいと思っています。

○ 藤本委員

えべつ未来戦略（別冊）の「はじめに」の記載内容について、これまでどのように実践してきたのかをまずお聞きしておきたいと思っています。たとえば2ページの1行目「こうした取組から生まれる江別市の魅力や多くの地域資源について、まずは市外の多くの人にその魅力を知ってもらい」とありますが、これまでどのような形で知ってもらうための取組を進めてきたのかをお聞きしたいと思っています。というのは、文章としては書いてありますが、最終的にこの審議会で議論したことが本当に実践されるのかどうか、ただの目標になってしまっているのではないかとこのことを懸念しています。「行政が情報を積極的かつ効果的に発信する」ということについても、何を以て効果的に発信したと言えるのでしょうか。「市民一人ひとりが江別市のことを熟知」という部分についても同様で、そのためにどのようなことを具体的にしてきたのかをお聞きしたいと思っています。

○ 隼田部会長

シティプロモートに関して、今まで実践してきたことについての確認ということだと思います。今回の総合計画は、今後どうしていくかというプランを立てているわけですが、その前提として今までの取組がどうだったのかという振り返りを確認したいということだと思いますので、事務局から説明をお願いします。

○ 事務局

「市外の多くの人にその魅力を知ってもらい」という部分に関しては、ホームページや各部署で作成するパンフレット・冊子などを活用して取り組んできました。具体的な話になりますが、たとえば、市外の方に転入していただきたいという場合には、江別市でのイベントや様々な情報を記載したものを札幌市の幼稚園等に配布するなどして、江別市のことを知ってもらい、来てもらうというという取組をしていました。企業誘致であれば企業誘致用にパンフレットを作成しています。江別市全般のことに関しては、市

勢要覧やホームページで周知を図ってきたというのが、これまでの状況です。そういったこれまでの取組に対する評価として、庁内議論の中で課題として出てきたのは、個別の事業ごとにバラバラのPRになっており、江別市全体として進めている状態ではなく、一体感がないということがありました。今回の総合計画では、そのような情報発信を一枚岩になって進めていこうということで、戦略に掲げたところです。

○ 藤本委員

2ページの下から4行目に「地域や組織の垣根を越えて、協力して地域課題の解決に取り組むことが重要」とありますが、具体的にどのような形で取り組むのか、何かビジョンはありますか。

○ 事務局

これから戦略を具体的にどう推進していくかという部分かと思います。予算要求もこれからの時期ですので、庁内検討の中では、これから具体的なプログラムを組み立てていくところです。一部、このような事業が想定できるのではないかとということで、既存の事業の拡大や組合せなどで進めていこうというところまでの議論はしていますが、個別の戦略を実際に具体的にどうしていくかという検討は、予算要求も絡めてまさにこれから各部局で連携しながら進めていくところで、まだ具体的な内容をお示しできる段階ではありません。

○ 藤本委員

私たち江別青年会議所は、地域を明るい豊かな社会にするために活動しています。それぞれの会員のお金でそれを実現するために活動していますし、様々な方から協賛をいただいたり、ご協力をいただいたりしながら様々な事業をやらせていただいています。

「地域や組織の垣根を越えて、協力して地域課題の解決に取り組む」という部分で、たとえば地方によっては、青年会議所の活動の一環を行政が担っているというところがありますが、今後そのような可能性はありますか。

○ 事務局

行政単独でこれからの江別市を盛り上げていくのは難しいことから、戦略を進めていくにあたっては、協働という考え方がベースにあります。市内には青年会議所をはじめとして様々な団体などがありますので、予算化するかどうかというのは別な議論になりますが、そういった様々な団体と協力して戦略を進めていくことは必要なことだと認識しています。

○ 湯浅委員

「地域や組織の垣根を越えて」という部分については、色々な方法があると思います。色々な企業や団体など江別市の関係者が、全道あるいは全国大会といった場に出かける機会が、年間相当な回数あります。それと、逆に江別市に石狩管内からだけでなく、全道規模の集会や研修会などで人が集まる機会があります。そこで、これから庁内議論を経て予算措置するのであれば、そういった機会に各団体に江別市をPRしてもらうた

めに、江別市の自然景観、農産物、食品などの情報をコンパクトにまとめて、視覚に訴えて目を引くような新たな資料を大量に作成して、各団体に配布してはどうでしょうか。市内のすべての団体に配布するとなると相当な財政支出になるのはわかりますが、少なくとも今度の計画の前期3か年から5か年くらいは集中的に取り組んで、それによって市民一人一人が広報マンになっていくというようなキャンペーンを打ってはどうでしょうか。これは事業提案ですので、総合計画の中に謳うのは難しいと思います。また、江別の特性や優位性を市内外に積極的にPRしていくという部分については、どの個別計画にも属さないと思います。このように、個別計画でも馴染まないものをどのように実行していくかが重要だと思います。

○ 事務局

江別市職員だけではなく、たとえば青年会議所や社会福祉協議会など様々な団体が大会などで市外に出かけていくときに持って行ける、全市共通のPRパンフレットのようなものがあれば、というご意見かと思います。

○ 湯浅委員

せっかく総合計画に謳われていることですから、個別計画のどこにも属さなかったとしても実現していくということが、最終的にこの総合計画を充実させていくことになります。

○ 隼田部会長

関連して質問ですが、今まで江別市と企業などの間で、そのようなPRのためのコンソーシアム（個人、企業、団体、行政などが、共同で何らかの目的に沿った活動を行うために結成する組織）のようなものをつくったことはありますか。

○ 事務局

おそらく無いと思います。

○ 隼田部会長

私もおそらく無かったのではないかと思います。このようにとても幅が広くて、実はとても重要なもので、しかも行政だけがやるという話ではないし、民間だけがやるというものでもないということは、藤本委員や湯浅委員のご意見のとおりです。そのような組織づくりというか、仕組みづくりのようなことが、どこかの個別計画の中で実行できるような道筋を総合計画の中につけられると良いと思いますので、答申の中に盛り込んでいくことになるかと思います。関連して、えべつ未来戦略（別冊）の19ページの「関係するまちづくり政策」の欄に09-02「透明性の高い市政の推進」とありますが、これだけだとちょっと弱いと思います。透明性が高いというのは市民に対してということですので、住んでもらうため、来てもらうためのイメージづくりというところをアピールするためには、今まで出てきた意見をどのように盛り込めば良いか、ご検討いただきたいと思います。市民目線でのPRとか、企業間連携というところを実行するには、市の枠組みだけではできないと思いますので、その辺りに少し踏み込めるような形を考えていただきたいと思います。

○ 高儀委員

江別市ではアンテナショップをどこかに出していますか。アンテナショップがあればそこに様々なものを置いて情報発信するのも一つの手だと思います。

○ 事務局

アンテナショップはありませんが、個別のイベントとして他市のショッピングセンターなどで、観光協会と協力しながら単発的に宣伝をするということはやっています。

○ 隼田部会長

江別のブランディングを総合的に一体的にやる、というところが今江別市で欠けている状況ですので、そこをきちんとできるようにするということを何らかの形で今回の総合計画の中で明記できると、個別計画や事業計画につながっていきます。

○ 藤本委員

端的に言いたいのは、このように総合計画に載せているからには、やはり実現しなければ意味がないということです。ただ話し合うためだけにこの審議会をやっているわけではありません。しっかりとこれが実現できるように、これまでどのような形で取り組んできたのかという実態を知らなければ、私たちはただ意見を出し合うだけで、本当に達成することにつながるのかどうか疑問を感じます。青年会議所では、毎年様々な事業をやっていますが、そのために江別市に協力をお願いする際に、名前を貸していただいたり、助成金をいただいたりする場合がありますが、人と人とのつながりが薄いというか、関わり合いを持てないと強く感じています。その部分に関して、「地域や組織の垣根を越えて」というのであれば、予算の問題以前にできることだと思います。それをせずに、総合計画に載せていることに違和感を覚えます。文章には書いてあっても、それを達成するための本気度が見えません。

○ 隼田部会長

藤本委員のお気持ちは、ここにいる全員が強く感じていることだと思います。ざっくばらんに申し上げて、藤本委員がおっしゃったように、これまではできていませんでした。だから今回、それをやらなければならないということで総合計画の中に文言として入れたのだと思います。ただ、文言は入りましたが、個別具体的な事業計画はこれから考えていく部分で、そのための大枠だけを決めるという総合計画の性質上、どうしてもその具体の部分がぼやけてしまって、文言だけで終わってしまうのではないかという不信感につながっている、というのが現状だと思います。そういう現状を打破していけるように、どのように取り組んでいってほしいか、あるいはどのように取り組んでいくのかという意思表示を何らかの形で入れなければならないと思います。このまま何となくぼやけたままで行ってしまうと、5年経っても10年経ってもぼやけたままになってしまっているのではないかというご心配だと思いますし、私もその可能性はあると思います。お金の問題ではなくて、人のつながりだと藤本委員はおっしゃいましたが、それはとても重要なところです。結局、当事者としてやっていないのに「協力」という形だからうま

くいかないのだと思います。だから当事者になれば良いということで、当事者になれる枠組みが必要で、その枠組みをつくるべきだということは、少なくとも答申の中に盛り込んでいく必要があります。計画素案から計画案にするまでの調整で、うまくそのことが盛り込めれば良いですが、それができなければ少なくともこの審議会として、特にシティプロモートに関する江別のブランディングの部分は、きちんと答申として明文化していくということにしたいと思います。

○ 蛭名委員

戦略プロジェクト3B「駅を中心とした暮らしやすいまちづくり（えべつ版コンパクトなまちづくり）」は、都市計画マスタープランでも謳われていることだとは思いますが、この「コンパクトなまちづくり」ということだけが独り歩きしてしまうのではないかと、現実とかけ離れているのではないかとこのことを危惧します。それと、推進プログラムの①と②は「駅を中心とした」ということにリンクしているように思いますが、③の「高齢者がいきいきと活動しやすい居住環境の充実」はこのプロジェクトに入るべきことなのかも疑問に思います。他の戦略よりも、この「えべつ版コンパクトなまちづくり」はとても具体性を持って切り込んでいるような気がして、私たち駅周辺以外の地域に住んでいる人間からすると、ちょっと抵抗感があります。若い人に来てもらって住んでもらうためには、そのような戦略を打ち出すことも必要なかもしれませんが、それだけで本当に良いのか疑問に思います。それと、③「高齢者がいきいきと活動しやすい」とありますが、「活動」がどのような意味を想定しているのか良くわかりません。「生活」であれば主な内容欄にも「高齢者が快適に生活できるように」とあるのでわかりませんが、「活動」となると、高齢者のすべてが「活動」するわけではなく、「活動」できない人もいます。その辺りについてちょっと抵抗感があります。

○ 事務局

まちづくり政策の方ではすべてを網羅しています。戦略プロジェクトは、その中で今江別市として当面やらなければならないポイントに重点的に取り組んでいくというものです。ですので、高齢者福祉をやらないという意味ではありません。

○ 蛭名委員

「コンパクトなまちづくり」というのは、どのようになればそれが実現されたことになるのでしょうか。

○ 事務局

過去に15万人の人口を目指して拡大型のまちづくりをしていたときは、面的な拡大を目指していました。それが今は人口の伸びが止まっており、拡大型のまちづくりの限界がきています。拡大した部分から中心部に移ってもらうことはできませんが、一定程度まちの機能を集約する必要があります。同じ公共施設を市内に何ヶ所もつくるのではなくて、駅を中心とした拠点に集約しながら、そこに高齢者向けの住宅を集中させるとか、逆に若い方には郊外に住んで伸び伸びと子育てをしていただくというようなことで、

様々なやり方があります。一般的に言われている「コンパクトシティ」という意味ではありません。蛭名委員のおっしゃるとおり、街中居住が正しいかどうかというのは議論のあるところですので、誤解を招くのではないかということは都市計画審議会でもかなり議論になっています。そこで、表現に気をつけて「えべつ版」という言葉を加えています。「えべつ版コンパクト」というのは、江別市にはせっかくＪＲの駅がありますので、それを大事にして、ＪＲの駅を起点にして考えていこうということです。この辺りのことは、今後議会の中でも相当議論になる部分だと思います。具体的にどのように進めていくかは、これから検討していくことになりますが、従来の１５万人都市を目指していたときの拡大型の考え方から方向転換していきたいという決意表明だと受け止めていただければと思います。

○ 蛭名委員

私はこの審議会で詳しく内容を聞くことができる立場ですので理解できましたが、一般市民の方が見たときに、「えべつ版コンパクト」のニュアンスがなかなか伝わらないのではないかと危惧します。

○ 隼田部会長

コンパクトシティの考え方が、かなり大掛かりな考え方に見えてしまいますので、そこが難しい部分だと思います。

○ 蛭名委員

住んでいる場所によっては、どうしたら良いのかと不安になる人もいるでしょうし、逆にそう思わない人もいるかもしれませんが。

○ 隼田部会長

実際に郊外に住んでいる人たちが、今の自分たちの状況を前提にしてこれを見てしまうと、自分たちの住んでいる郊外のことをどう考えているのかと疑問に思うのは当然のことだと思います。ただ、私の個人的な状況で申し上げますと、これまでずっと車に頼って生活していて、駅から遠いところに住んでいました。ところが、だんだん体の調子が悪くなってきたので、都心部に居住してなるべく車に頼らずに自分の足で通勤できるようにしようと考えて引っ越しました。引っ越した後に病気になって、今は車を長時間運転するのは難しい状況になりました。そのような状況になったとしても、自分がちゃんと活動できる、自分が行きたいところに手軽に行ける環境をどうやって確保するかということが、非常に重要な問題であるということを身に染みて感じています。お年寄になって、免許を返納すると急に自由な交通手段が無くなり、すごく不便になります。ですが、駅に近くて公共交通が充実しているところに住んでいれば、今までと同じように活動できるわけです。ですから、誰にも頼れず、周りに買い物できるお店も無いという、どうしようもない状況にならずに済むような方向性を、しっかりと市として考えるべきだというのが、今回の戦略の「えべつ版コンパクトなまちづくり」だと思います。それで、推進プログラム③は住み替えやバリアフリー化への支援という内容になっています。ですから、「高齢者がいきいきと活動しやすい」の「いきいき」という部分は、とても

レベル差があって、山登りをする80代の人がいれば、体の調子が悪い人もいるわけで、その人なりの「いきいき」とした活動ができる、というふうに解釈していただくと、意味が伝わるのではないかと思います。行政として、すべてのことに力を入れるというのは財政的に無理です。ですから、重点的にどこを進めていくかといったときに、少しずつでも、住み替えたいと思った人が市外に出て行ってしまうのではなくて、市内の身近なところで住み替えをしてもらって、持続可能な生活をサポートしていく手立てをつくっていくというのがこの戦略です。

○ 蛸名委員

たとえば住み替えのことについても、具体的にはどのような形で進めていくのでしょうか。今現在、郊外に住む高齢者の方が駅周辺に住み替えをすることを考えたときに、現実的に希望者が住み替えられるような状況にあるのでしょうか。

○ 事務局

現状ではありません。一つの例としては、大麻南樹町の介護施設をつくったときに、これまで郊外型だったものを街中に施設をつくりました。国の指針で、郊外ではなく街中に施設をつくって、地域の中で生きていってもらうという高齢者サービスの展開に変わってきています。今後の事業展開として、サービス付き高齢者向け住宅の展開をしたいという事業者もいます。ただ、市内には国土交通省が進めているサービス付き高齢者住宅という認定を受けたものはまだ一つ也没有。その部分について、江別市として高齢者福祉という視点でどうするかということについて、現状では個別計画にありませんので、大きな課題ではないかと思います。大麻地区をモデルとしてアンケートを実施したところ、大体2割の人が住み替えをしたいと考えており、その中の約2割の人がサービス付き高齢者住宅に住みたいと考えています。そうすると、やはりそういった受け皿を今後きちんと用意する必要があります。それも、1か所にまとめるのではなくて、地域のコミュニティを壊さない範囲で、サービス水準が低下しない一定数の数を、江別・野幌・大麻地区に分けて用意する必要があります。それと、収入やそれぞれの生活レベルの問題など、非常に難しい問題もあります。老人下宿と言われるものはすでに5～6か所ありますので、そういったものも含めて、それぞれの収入等に合わせて様々な形態の施設を用意しておく必要があると考えています。

○ 隼田部会長

様々なニーズがあり、必ずしもサービス付き高齢者住宅に入りたい人ばかりではありません。札幌市の例ですと、一時期札幌駅の北口にマンションがどんどん建って、それまで学生が主に居住していたのが、家族向けのマンションができて、高齢者も郊外から住み替えをしてきています。大きい一軒家からコンパクトな住まいにしつつ、福祉サービスを受けるのではなく、自分の生活を便利なところに求めるという人たちが増えています。その人たちが、地域とのつながりが完全に途切れてしまって孤立しているという問題が起きています。そういった孤立している人たちをつなぎ合わせるようなソフトサービスを住民が中心になってはじめていて、それを札幌市がサポートしようとしています。

まさに今回のえべつ未来戦略で謳っていることと同じようなことが、すぐそばで「住み替え」ということがキーワードになって起きています。福祉施設やそれに準じるもの、もしくはそれとは全く別の住宅としてのものなど、様々なものがこれから整備されていくように方向性を示していくのが、今回のえべつ未来戦略だと思います。現状ではそれが無いわけですから、無いままにして何もしなければ、そのまま何も無いままになってしまいますので、市としての今後の方向性を、ある意味問題提起するべきだと思います。

○ 高儀委員

大麻の知人が一軒家に住んでいましたが、冬の除雪が大変になって、すぐ側のマンションに引っ越しました。もともとの家は居抜きで売ったので、家具も買わずに若い人がそのまま入居するという形で、引っ越した知人は住み慣れた地域で環境も変わりません。そういう住み替えのスタイルに対する支援があると良いと思います。

○ 蛭名委員

そのようなマッチングができると良いですね。

○ 事務局

そのために今年度、国の予算を使ってシステムづくりをしています。できれば不動産業者など民間事業者のビジネスとしてできるような仕組みをつくりたいと考えており、7月からモデルとして実施して、来年以降2年間その事業展開を市の方で国費と併せて予算を用意して、4年後には一本立ちできるような仕組みづくりをしています。

○ 隼田部会長

まさに今回の戦略に則った個別の事業が先に動いており、マッチングさせようとしているということですね。実際、大麻地区で札幌に転出してしまっている人もいますので、そういった人たちをつなぎ止めることになります。

○ 湯浅委員

前回の審議会での意見を踏まえて、駅周辺以外の地区のことも十分考慮するという文言が入っています。文言は入りましたが、これから10年間でこれをどう具体化していくかが重要です。個別計画のどこを見ても相応しい分野がありませんが、せっかく出されたみなさんの意見ですので、それをぜひとも担保してこれからの施策展開にあたって形にしていきたいと思います。たとえば今、新栄団地の建て替えにあたって、住み替えに手を付けることができます。江別市全体で今後空き家が増えてきますので、民間サイドのことで調整は難しいですが、住み替えによってそういった空き家など不動産の流動化を促進して、どこに住んでいても住みやすさが確保されるようにできると良いと思います。雪が多くて交通の不便もあり、公共交通のバス路線の確保などのことにも連動します。さきほどから議論になっているように、市民の皆さんがこれから新しい計画がスタートした時に、わかりやすく、そして将来の可能性も期待できるものでなければなりません。公共交通の問題にしても、どんな方法が一番良いのか早急に結論を出して、そういうものとセットで、具体的に実現できる道筋を何らかの形で市民の皆さんに示していくことで、計画に対する理解が深まると思います。さきほど「高齢者の活動」とい

うことが議論になりましたが、「活動」というのは体を動かすという意味だけではなくて、内面的な部分で地域社会にどう貢献していくか、これからの人生で今まで蓄積してきたものをどう自分のため、人のために活かすか、それが自分の心の満足になっていく、という意味合いにも取れます。これと住まいや公共交通のことも全部セットで考えて、何とか総合計画に謳ったことが実現できる手立てを早急に検討して、計画ができると同時に大筋の対策くらいは打ち立てられなければ、計画書だけが独り歩きすることになってしまうと思います。

○ 隼田部会長

総合計画より先行している事業があるとのことですが、そういった事業がすでにあるということは、この総合計画の方向性に則ってきちんとやっていくという意思を示すことにつながりますので、それを上手く表現することはできませんか。先行している事業に関しては、もうすでに実行していると言えるわけですから、それができると、絵空事ではなくて江別市として真剣に考えているということが伝わって、説得力が出てくると思います。

○ 事務局

そういった事例は他にもあります。えべつ未来戦略（別冊）の15ページにある「子どもの遊び場」についても、事業計画が出来上がっており、25年度予算で実施する予定です。ただ、個別に総合計画の中にそれを記載していくと際限がなくなってしまいます。個別の事業を戦略に紐付けていく作業をこれから事務局で行っていく予定です。まずは戦略を決めていただいて、その上で既存の事業や新規に取り組む事業などを紐付けていくことになるため、分かり難くなっています。

○ 隼田部会長

行政側の視点からすると、事業のすべてをきちんと正確に示さなければならないという意識が働いてしまうと思いますが、たとえば事例としてこんな取組をやっていると、これから少しずつ広げていく、ということを事例紹介のような位置づけで示すだけでも良いと思います。総合計画で掲げた理念が、末端の個別計画に至るまでの間に骨抜きになってしまうという残念な事例が、日本全国で山ほどあって、それに食傷気味になっている人が多い中で、きちんと実施に向けて動いているということを示すというのは、特に今回のような新しい形の総合計画では重要なことだと思います。先ほど藤本委員がご心配されていたことは、すべての項目について色々な人が感じる事柄だと思います。市の意思表示を具体的に示すというのは、市民の理解を得るのにとっても効果的ですので、何らかの形で示していただけると良いと思います。

○ 事務局

新しい総合計画に紐付ける事業とその事業をどう展開していくかということは、計画がスタートしてから検討するのではなく、26年度予算編成の段階からすぐにできるものについては実施していく方針となっています。12月くらいには予算の枠組みが内部的に固まり、最終的には3月議会にも提出しますので、その中では新しい計画に紐付け

られる事業としてどのような事業があるかを示すことができます。そうすると、市民にも新しい総合計画のイメージが伝わると思います。

○ 隼田部会長

その時期までのつながが必要です。計画素案が出てきたときに、その内容が画に描いた餅なのか、それともある程度進みつつある、可能性・実効性のあるものなのか、という不安感を払しょくすることが必要です。今回、先行事例がいくつか持ち駒としてあるのであれば、それを積極的に活用して市の意思表示をした上で、ここから先はこれからの議会審議など様々な段階を経て、最終的に具体的な予算事業として示すことになるという説明をすると、市民の納得度はかなり違うと思います。

○ 事務局

今の財政状況では、完全に新規の事業を大きく打ち出すというのはなかなか難しい部分がありますので、既存の事業をきちんと見直して、リニューアルしながら新しい計画に紐付けていき、それを集約して戦略を構築していくという形になるかと思います。

○ 蛭名委員

新しい総合計画の戦略と言いながら、既存の事業を紐付けていくというのは如何なものでしょうか。

○ 隼田部会長

既存の事業で、過去の計画に則った事業などは、新しい計画に合わせて見直しを加えて再構築していくということだと思います。

○ 事務局

現状では部局ごとに事業を持っていて、そのため事業展開も部局単位で止まっています。それをどのように組織横断的に、全庁統一的に取り扱っていくかというのが一番の課題です。そのために、今回のえべつ未来戦略では組織横断的にプロジェクトをつくっていくことにしています。

○ 高儀委員

人口15万人都市を目指して考えてきた事業を、これからは12万人、10万人規模を想定して切り替えていかなければなりません。今回の計画で、まさにそれを切り替えていくときに、どのようなビジョンを持って取り組まなければならないのかを考えるのが、私たちの役割だと思います。具体的な事業の事例など、記載できるものについてはある程度「見える化」していただけると、私たちにも、一般の市民にとってもわかりやすいと思います。

○ 隼田部会長

まさにまちづくり政策09-02「透明性の高い市政の推進」のところだと思います。全部ではなく、ほんの少しでも見せられるものだけでも良いと思います。それだけでかなり印象が変わります。

「えべつ版コンパクト」のことから、だいぶ話が発展してしまいましたので、もう一つの戦略プロジェクト3A「社会全体で子どもを産み育てる環境づくり」についての議

論に移りたいと思います。

○ 湯浅委員

推進プログラム③の「子どもの遊び場」の「場」というのは、チャンスや機会という意味のソフト面も含めた意味だと解釈してよろしいですか。

○ 事務局

ハード面の場所という意味の「場」の提供と、チャンスというソフト面の意味の両方です。

○ 湯浅委員

推進プログラム①のタイトルに「産み育てられる支援体制」とあります。「産む」ということについて、意識の問題や出産前後の問題など、様々な問題が顕在化していますので、主な内容欄にも安心して「産む」ことができるための支援策について記載した方が良いと思います。

○ 隼田部会長

江別市に住んで、江別市で産み育てたいと思わせるにはどうすれば良いのか、ということは具体の事業内容になってしまうので、表現が難しいところだと思います。とはいえ、そういうことをきちんとやっていかないと、戦略4のシティプロモートに関して、住んでもらうための情報発信という部分の魅力づくりにもつながりません。どのように具体化されていくのかが見えにくい部分ではあります。

○ 湯浅委員

ここ数年で、この分野の市立病院の体制も整っています。妊産婦への配慮も含めて十分に取り組んでいるまちだということを打ち出すと良いと思いますが、どのような表現とすべきかは難しいところです。

○ 高儀委員

独身の男女の出会いの場のサポートといったことは、この中に入っているのでしょうか。「産み育てる」ということですので、その前の段階の出会いの場をどうするかということについて、江別市としてどう考えているかを示せば、江別に定住する人が出てくるのではないかと、という意見がこれまでの審議会の中で出ていたと思います。様々な市町村で、出会いの場として「まちコン」などをやっているという話を聞きますので、商工会議所と協力するなどして江別市でもやってはどうか。

○ 隼田部会長

産むまでの助走期間の部分かと思います。戦略として捉えたときに、その助走期間の部分まで捉えてしまうと、焦点がぼやけてしまうかもしれません。そういう要素もあるけれども、特にそこから先の部分だけに力を入れて焦点を当てるとというのは、戦略としてはありだと思います。

○ 湯浅委員

産むまでの助走期間の部分は、一人一人の価値観や個人の意思に関わる部分が大きいと思います。基本的には社会全体で環境を整えることによって、そういった意識が高まりますし、同時に民間サイドで出会いの場は色々と提供しています。少なくともここでは「産み育てる」がタイトルになっていますので、主な内容欄を「既存の子どもを産み育てる支援政策を」という表現にして、現在進めている市立病院の充実策と併せて一体的に進めていくということをここに表現すると良いと思います。

○ 藤本委員

子どもを産み育てる環境など、江別市の良いところはもっと情報発信した方が良いと思います。そうしないと、そもそも自分の住んでいる江別市の対応が良いのか悪いのかすらわからないため、自分の感覚で良し悪しを判断してしまうと思います。情報があって、それが判断基準になるべきだと思いますので、良いところを積極的に発信することでそれが定住促進にもつながっていくと思います。たとえば、新しい子どもの遊び場ができるという話でしたが、私たちがその情報を広める分には市の責任にはなりません。市で予定の段階の事業を見切り発車で情報発信してしまうと、あとでそれがもし実現できなかったときに問題になってしまうかもしれませんが。江別は素晴らしいところだとPRできることはたくさんあると思います。自分も江別に住んでいて、良いまちだと思いますが、それは江別のことを知っているからで、知らない人の中には不便だと思う人もいますので、もっとPRしていかなければならないと思います。そしてこのことはすべての戦略に関わってくることです。

○ 隼田部会長

宣伝というのは難しいことだとは思いますが。思いっきりPRしたことによる反動を恐れてしまうとPRできなくなってしまうし、かといってPRしなければ誰にも知ってもらえず、ネガティブな情報だけが独り歩きしてしまいます。特に北海道は札幌市に一極集中で、それ以外の都市はどれも札幌市とは比較にならない規模です。江別市の場合には札幌市のすぐ近くにあって、ベッドタウンとして住んでいる人もたくさんいるわけですが、そうすると比較対象として見ているのは札幌市だったりします。情報が無いからこそ、市民の向く方向が変わってしまうということがあります。そこは英断をして、情報発信できる範囲のぎりぎりまで発信していくということは必要かもしれません。それを行政が主体となって発信していくのか、藤本委員がおっしゃるように行政以外が発信していくのか、その組み合わせも上手く考えられるような仕組みづくりを考える必要があると思います。

○ 蛭名委員

推進プログラム③の主な内容欄で、「高齢者をはじめとする先輩保護者と交流を深めることができる環境の整備」とありますが、今年度に新たに整備を予定している子どもの遊び場は、こういったことまで想定しているのでしょうか。

○ 事務局

そこまでは想定していません。その部分は地域の子育てサロンなどを想定した表現です。今回、大麻東町でシルバー人材センターが始めた事業もこの部分に当てはまるものだと思います。

○ 隼田部会長

そういう事業についても、具体的に進んでいる今までになかった新たな事例であれば、ぜひ示していただけると良いと思います。また、そういった色々な取組をどうやって広報していくかということです。

○ 湯浅委員

一度にたくさんの事例を紹介するのではなくて、毎月の広報紙で、あるいは2か月に一回でも良いので、そういった未来を担う子どものための取組事例を紹介していくと良いと思います。

○ 隼田部会長

たとえば「えべつ未来づくりビジョン便り」のようなコラムがあって、今月号ではこの戦略の部分でこんな事例が進んでいる、というようなことを紹介するというイメージかと思います。市民向けには簡単にできることですし、WEBで配信すれば市外にも発信できます。

○ 湯浅委員

「シティプロモート」や「北海道フード・コンプレックス国際戦略総合特区」の言葉には注釈をつけた方が良いと思います。

それと、戦略プロジェクト1Bに「大学及び学生」、「学生の力を活かした」などの表現がありますが、「大学」の中には大学の組織を挙げてということで、教職員も含まれるということでしょうか。

○ 事務局

含んでいます。

○ 隼田部会長

本日はまだ素案全てに目を通しきれていない中での議論でしたが、その中でも、素案の基本的な方向性に関しては問題ないということが確認できたかと思います。次回に向けて中身を精査していただいて、ご意見をお持ちいただければと思います。

(3) 次回の審議会について

次回の第6回行政審議会（部会）の日程調整のため、各委員の都合確認

第1候補 7月22日（月） 18：00～

第2候補 7月24日（水） 18：00～

■閉会